～モロッコ旅行記～

味わいあるモロッコの旅

新居靖子

～モロッコ旅行記～

味わいあるモロッコの旅

初めてモロッコを訪れたときは、もう二度と、ここへは来ないと思っていた。ここを去った時、どんなにホッとしたことか…。それがなぜか一年後リピーターとなっていた。まさか自分がリピーターになるなんて、夢にも思わなかったはずなのに…。

始めはカルチャーショックを受け、辛いことばかりの旅だった。日本とのギャップについていけず、モロッコ人とうまく付き合えなかった。ガイドブックを読みすぎたためか、始めからモロッコ人を警戒していたのも原因の一つだと思う。モロッコ人の『話し好き、世話好き』を、トラブルの素だと思いこみ、うっとおしがってばかりいたが、旅を続けるうちにこれがこの国の良さなんだと思い始め、それからおもしろさを味わえるようになっていった。

スペインの南、アルヘシラスという港町からフェリーに乗り、二時間半でモロッコのタンジェに到着した。

モロッコへ行こうと思ったのは、友達とスペイン旅行を計画中、ついでに足を延ばしモロッコへも寄ってみようかと、ほんとに軽い気持ちからだった。まさかこんな旅が待っているなんて思いもしなかった。

フェリーがモロッコに着くと、ジュラバ姿（モロッコ男性の衣装）のモロッコ人係員が何人もフェリーの中へ乗り込んできた。この瞬間、『モロッコへ来たんだ！』と、すぐに実感した。『ネズミ男』そっくりのその姿が、当時は何とも異様で恐ろしく感じたことか…。

モロッコへ足を踏み入れたものの、ガイドブックに書いていたように、ガイドがまつわりついて来て、自分で何かしようにもガイドに指図されているようで、逃げ出したくなった。今来たフェリーで戻ろうかとも考えたが、あいにく最終便だった為あきらめ、まず両替をしようとうろうろしてみた。開いているところが見つからず、しぶしぶついてきたガイドが言う両替所に行って両替を始めたら、両替所の店員が、私達を連れてきたガイドに、百ＤＨ（デラハム）という高額を手渡しているのを目撃してしまった。「やられた！」と思った。お客を連れてきた報酬をガイドが受け取ったんだとすぐにわかった。案の定、両替ではかなりボラれてしまい、文句を言ったがあきらめざるを得なかった。

とりあえず、この嫌な町から早く逃げようと、夜行列車に乗ることにした。そしたらキップを買うだけな

のに、売場のおじさんとのやりとりがスムーズにいかず、随分手間取ってしまい、それだけで相当疲れてしまった。それでも何とかキップを手にし、列車に乗ってみたが、今度は真っ暗な車内で、モロッコ男性のギラギラ光った大きな瞳がいっせいに私達に向き、その視線が恐ろしくなって足がすくんでしまった。わざわざ白人旅行者が乗っていた車両に乗り換えて、やっと席に着くことができた。こんなことでこの先どうなるんだろうという不安で一杯になり、やっかいな国へ来てしまったことを後悔し始めた。

翌朝、無事目的地のマラケッシュに着き、何とかホテルは探して決められたが、観光や食事にでる勇気はなく、カルチャーショックはつのっていく一方だった。どうしようもなく郵便局でうろうろしていたら、日本人旅行者と出会い、「この先きっといいことあるので、旅を続けて下さい」と、あきらめていた私達を励ましてくれた。その日本人旅行者から旅の情報をもらい、またその後出会ったカズ君という旅行者のおかげもあり、カルチャーショックは少しずつましになっていった。

カズ君は旅行中、現地人にだまされ、持っていたお金をひったくられるというトラブルにもあいながら、自分から現地人の中にとけ込もうとして楽しんでいた。その彼の姿を見て、初めて自分達がとってきた態度が、問題を大きくし、この国に慣れない理由の一つだということに気付いた。

実は夜行列車で到着したマラケッシュで、町の中心（フナ広場）まで行くバスに乗ったとき、英語で話しかけてきたおじさんを無視してしまった。無視する私達にしつこく話しかけてくるのを見かねた車掌さんが、そのおじさんを注意してくれたのだが、二人は車内で喧嘩を始めてしまい、まわりにいた男性何人かが止めに入ってやっとおさまった。無視した言い訳をするなら、初めての所で知らないおじさんと話す余裕がなかったと言いたいとこだが、本当はややこしい人にはかかわらないでおこうと思っていたためだった。だからカズ君と出会うまでは、おじさん達の喧嘩の原因を私達が作ったことに、あまり悪びれもせず、気にもしていなかった。

夜になると大道芸人でにぎわうフナ広場で、ゲームを一緒にしようと誘ってくれた男性と仲良くなり話をしようとした時も、うっとおしいガイドが割り込んできたせいで、てっきり彼もガイドの仲間だと勘違いしてしまった。それで彼にゲーム代を払ってくれたお礼も言えずじまいで、私達はその場からさっさと逃げてしまうという、失礼なこともしていた。

モロッコはフランスの植民地だったので英語よりフ

ランス語が通じた。フランス語のできるカズ君と途中で一緒に行動できたおかげで、現地の人と話したり、案内してもらっても安心でき、現地人とのつきあい方が少しつかめてきたと思っていた。

ところが、カズ君と別れ私達二人になって移動したエルフードという町で、手強い奴らが待っていた。エルフードは砂漠に行く出発点となる場所で、メルズーカへ行く砂漠ツアーの客引きが山のようにいた。私達はここへ来る前に別の町で現地人から、「砂漠ツアーは高いので、現地人が利用している乗り合いタクシーに乗れば、安くで砂漠のあるメルズーカに行ける」と教わった。「エルフードに着いたらすぐにガイドが寄ってくるだろうが、まず警察に行って、警察にこの紙を見せてタクシー乗り場を聞きなさい」と、タクシーの名前と行き先をアラビア語で書いた紙をくれた。私達旅行者にタクシー乗り場はわかりにくいということだった。案の定、エルフードに着いたら即ガイドが声をかけてきた。それがなんと日本語だった。巧みな日本語を話すレゲエの兄ちゃんだった。悪い気はしなかったがガイドは必要なかったので、丁寧に断ったつもりだったのに、「アホ、バカ、クレイジー」と、怒鳴られた。腹が立ったが相手にせず放っておこうとがまんした。警察を探していたら、建物の前に警官らしい制服の人が立っていたので、彼に書いてもらった紙を見せてタクシー乗り場を尋ねてみた。彼は、「私は英語がわからないのでこの人に聞いて下さい。彼はＧＯＯＤ　ＭＡＮだから」と、どこからかタイミング良くやってきた私服の男性にまかせて消えてしまった。ＧＯＯＤ　ＭＡＮのようには見えなかったが、しぶしぶ彼に聞いてみたら、「そんなタクシーはない」と言われた。十五ＤＨのこのタクシーだと書いてもらった紙を見せ説明したが、「最近まではあったが今はもうない。ツーリストはみんな五百ＤＨとか出して砂漠に行くのに、十五ＤＨで行けるわけないだろう」と、全く相手にしてもらえなかった。さっきのレゲエのガイドもだが、どうして私達はこんなに冷たくされるのだろうと思うと、急に涙が流れてきた。そしたらさっきの制服のおじさんが現れ、泣いている私を見て建物の中へ入れてくれ、洗面所で顔を洗いなさいとやさしく気遣ってくれた。しばらくそこにいると、今度は別の私服の男性が英語で話しかけてきた。タクシーの書いた紙を見せ説明しようとしたら、あっさり彼は、「これに乗りたいの？今から見に行く？」と、すぐにタクシー乗り場へ連れて行ってくれ、予約までしてくれた。「やっぱりちゃんとあるじゃないか！」と、ＧＯＯＤ　ＭＡＮに言ってやりたかったが、それよりも平気で嘘の芝居をやりとげたＧＯＯＤ　ＭＡＮに心底驚いた。

タクシーの出発まで時間があり、タクシー乗り場へ案内してくれた彼のおうちへおじゃますることになっ

た。あまりホイホイと、どこへでもついていく私達ではないが、タクシーのこともあって彼のことは信用できた。彼はアハメッドと言い、あの建物で働く警察官で、同僚と一緒に住んでいた。少しの間だったが、同僚何人かとメイドさんにも会った。アハメッド以外は誰も英語を話せなかったので、会話はあまりなかったが、今まで出会ったモロッコ人とはちょっと違う、観光客慣れしてない彼らと出会って、素顔のモロッコ人を知ることができたように思う。

乗り合いタクシーの出発時間になり、アハメッドにまた連れて行ってもらった。乗り場に着くと、「アホ、バカ」と連発したレゲエのガイドがおり、警官のアハメッドと一緒に来た私達を見て相当驚いていた。すぐ私達に「ゴメンナサイ」と何度も謝ってきた。『ざまーみろ！』って感じでいい気分だった。

タクシーはぎゅうぎゅう詰めで暑く、砂ぼこりが舞い、道が悪いため体は上下に飛び跳ねまわった。安くあげると辛いなぁと思いつつ結構楽しかった。出発を待っているときに、しつこく寄ってくるガイドを追い払ってくれたおじさんが、途中でオレンジをくれた。香り以上に濃い味で最高においしかった。ホテルに到着し、私達はタクシードライバーからお釣りをもらおうと待っていると、ドライバーは私達の荷物を指し、荷物代がいると言いだしお釣りをくれなかった。『お釣りをくれ！』と、手を出して請求するとやっと、しぶしぶだが返してくれた。オレンジのおじさんがそれでいいとうなずいてくれ心強かった。私達のことが心配でずっと見守ってくれていたようだった。

着いたホテルに日本人が泊まっていて安心したが、モロッコが三度目だと知って驚いた。ここまでで相当懲りていた私達は、繰り返し訪れるほどここが魅力ある国だとはどうしても思えず、リピーターがいるとは思わなかった。その時の私達に、この国の味をしめた者のことなど想像もできなかった。

リピーターの彼女達はラクダに乗ってサンセットを見に行っていたが、私達は自分の足で歩き、誰にも邪魔されずに自分達だけで感動を味わいたかった。ところが、なかなかうまくいかないもので、子供に「お金ちょうだい！」と、ずっと付きまとわれ最悪だった。ホテルでもラクダに乗ったり、食事をとったりした彼女達は、いいお客だったようだが、断り続けた私達は、ホテルから歓迎されず居心地が悪かった。苦労したわりには冴えない砂漠の旅だった。

エルフードに戻り、そこから帰路に向かうためフェズ行きのバスを待っていたら、レゲエのガイドや、乗り合いタクシーでしつこく話しかけてきやガイド達が、次々とまた近寄ってきた。嫌だなぁと思っていたが話を聞いてみると、フェズは悪質ガイドが多いので気を付けるようにというアドバイスだった。『自分のこと

棚に上げてよく言うよなぁ！』と、呆れてしまったが、「ご親切にどうも」とにっこり返事しておいた。

ダイレクトに走らない民営のバスだったので、フェズまで十一時間もかかり、その間ぼろバスに座りっぱなしだった。また何かやっかいなことが起きるのを恐れ、途中の休憩で食事に行ったりトイレに行くことができなかった私達は、もう少しでこの国から脱出できると、それだけを考えて耐えていた。ようやくフェズに着き荷物をバスの屋根から降ろしてもらいホッとしていたら、いきなり「マダーム！マダーム！」と叫ばれ、お金を要求された。払う必要ナシと判断した私達は一気に走り、追いかけて来る奴らからなんとか逃げ切った。けっこう勇気がいったが、バスの荷物代にはいいかげん頭に来ていたので、これですっきりした。それでも何か行動を起こす度に面倒なことばかりやってくるこの国には、ほとほと嫌気が刺し、早くこの国から逃げたいという一心で、スペインへと戻って行った。スペインに到着しフェリーを降りたときは、もう誰にもうるさく言われることがなく静かだった。モロッコの旅がこれでやっと終わったと心からホッとした。

天国と地獄を一気に味わったような旅だったが、時間が経つと案外すべてがいい思い出として残っていた。新たな期待もあり、それで一年後リピーターとなった。

前回知り合った友達と再会するのも今回の目的だったが、彼らがいればうっとおしいガイドは寄ってこないだろうし、穴場に案内してくれるかも、という期待があった。ところが実際会って見ると彼らは旅行なんてしたことがなく、おまけにガイドの取り締まりが厳しく、許可なく旅行者と現地人が一緒に行動してはいけないことになっていた。

カサブランカの空港で、前回知り合いになった田舎出身のラッシーが出迎えてくれた。彼自身、都会は初めてだったようで、さすがに心細かったのか、彼の兄ちゃんと一緒だった。都会の土産物屋で働いている兄ちゃんは、海外旅行も経験していて、かなりあか抜けしたモロッコ人だった。彼らの親戚のお宅に連れていってもらい泊めてもらった。

朝市に行ったり、子供達と遊んだり、教科書を見せてもらってアラビア語やフランス語を教えてもらった。少しの間だったが、一般家庭を覗くことができた。このお宅が一般か、上流かまではわからないが…。それでもコカコーラ一本賭けてトランプしたときは、大人も子供も負けまいと必死だった。私が負けておごることになったら、みんなすごくうれしそうにしていた。たったコーラ一本でほんとにいいのかと疑ってしまったが、ここではそれで充分ごちそうのようだった。このお宅へは突然来たので、何もお土産を持たず、お世話になるばかりだったので、私もほんの少しだがお

返しができたようでうれしかった。

一日だけ滝を見に行こうと、兄ちゃんがタクシーをチャーターしてくれたが、けっこうな額取られてしまった。ラッシーの兄だと思って信用していたが甘かった。ツーリストのことをよく知っている彼は、都合のいいときはすごく親切だったが、そうでないときはあからさまに恐い顔をしてみせ、ツーリストに接する独特な態度を見せていた。おもしろいキャラクターで私達を笑わせてくれた、ここのご主人であるおじさんや、私達の持ち物に興味津々だった奥さんや、素直な子供達、そして心から親切にしてくれたラッシー、彼らには兄ちゃんから悪い影響を受けないで欲しいと、心から願って別れた。

そのあと、『休暇を取っていつでも案内してあげるよ』と、親切な手紙をくれていた警官のアハメッドと再会した。ところが会ってみると、彼の休暇は二日しかなかった。私達は砂漠のあるメルズーカに行こうと誘ったが、ここの近くはだめだと、どうしても遠くに行きたがった。「僕は警官だから」と、主張するばかりでさっぱり訳がわからなかったが、プライベートの自由があまり許されず、休暇だからどこで何をしてもいいというわけにはいかないと、こういう理由だった。これにはほんと驚いた。それでもはじめ書いてくれた手紙の内容と随分違うと言いたかったが、彼らがよく言う『インシャラー！（神のみぞ知る）』と言って流さなければ付き合ってられない。

実は、彼と再会するまでにもハプニングがあった。私達が日本を出発する一ヶ月ほど前に彼は、私達の都合もろくに聞かずに勝手に待ち合わせの日と場所を手紙で知らせてきた。私達は、はっきり約束できないので家で待っていて欲しいと返事したのに、彼はその手紙を無視して約束の場所に行ったと、あとで彼の同僚から聞いて知った。電話、ファックス、携帯電話、電子メールと何でも揃っている時代に、彼らはプライベートで何一つ持っていなかった。スムーズに約束もできないと経験してみて初めて、私達の今の便利な生活をありがたく思った。

そんなこととは知らず、彼が家で待っているものと思って彼の家に向かっていたら、途中で出会ったガイドが（なぜか私やアハメッドのことを知っていて）、アハメッドが引っ越ししたことを教えてくれ、彼が留守なのも知ってか、彼の同僚を仕事場から呼び出してもくれ、アハメッドと連絡をとることが出来た。うっとおしいと思い続けていたガイドもたまには役に立つ

んだと初めて感謝した。これでガイドを見直した私達は、調子に乗ってそのガイドの連れがやっているというホテルに泊まることにした。ホテルに行ってみると見たことのある人がフロントに立っているなぁと思っていたら、なんと昨年大芝居したＧＯＯＤ　ＭＡＮだった。ここは彼のホテルだった。嫌な予感はしたが彼を信じてみようと泊まってみると、案の定ミネラルウオーターの料金が二倍もし、チェックアウトが一時間過ぎたという理由で二泊分の料金を取られてしまった。この国の安宿にチェックアウト時間の決まりがあるところなど、後にも先にもここ一件だけだった。昨年のこともありこれのどこがＧＯＯＤ　ＭＡＮなんや？と思ったが、これもインシャラー？！

警官のアハメッドとは結局、彼の身分がばれないように、少し離れたティネリールという小さな町に行ったが、ここを案内してもらうもなにも、彼はここが初めてだった。そのうえホテルで食事をとるのも、泊まるのも、彼の人生で初めて、何もかも初めて尽くしで、全く頼りにならず私達が案内したようなものだった。

アハメッドの休暇も終わり、私達は彼の実家があるザゴラへ行ってみることにした。アハメッドからバスがザゴラに着いたら、そこからタクシーに乗って彼の家へ行くように教わった。タクシー代は三ＤＨだと言っていたので、着いたときにドライバーに三ＤＨ払ったら、二十ＤＨのお札を見せ、これだけ必要だと怒っていた。アハメッドの義姉が出迎えてくれ、ドライバーは彼女にも足りないと訴えていたようだが、彼女はよくわからないって態度で、結局ドライバーはあきらめて帰って行った。アハメッドが三ＤＨって言っていたし、これでいいんだと思っていたが、よく考えてみると乗り合いタクシーだったので、三ＤＨと言っていたのは一人分の料金のことだったのだと気づいた。本当は二人分払わなければいけないとこを、今回はタクシー代を一人分踏み倒してしまった。料金設定があってないようなことが多く、よくボラれてたくさん払わされていたのに、払わなくていいときもあるんだとおかしくなったが、以前アハメッドが言っていた床屋の話を思い出した。僕たちは床屋に行って、お金がある時はたくさん払うけど、ないときは全く払わない。お金を持っている私達はボラれているんではなく、多めに払うのが当たり前なのかもしれないと思った。タクシーの運ちゃんには家を探し回って連れてきてもらったのにと、ちょっと罪悪感がよぎった。それでもボラれることはやっぱり許させず、今でも納得しているわけではない。

ここへ来たのは、昔、遊牧民だった家族が、砂漠の土地でどんな生活をしているのか見てみたかったからだ。でも家には電気もテレビもあった。シャワーだけ

がなく、バケツに水を汲んでトイレで水浴びするようになっていたが、あまり不自由は感じなかった。夜、「庭で寝るか、部屋がいいか」尋ねられ、当たり前のように部屋にしたら、コンクリートの床に上に薄い布を敷いてくれただけだった。体が痛くて一泊が限度とぼやきながら、土の上に絨毯を敷いてくれた庭にすればよかったと後悔した。コンクリートの床はひんやりと冷たくて気持ちよかったから、まだなんとか耐えられたが、思いがけない経験だった。

昼間のザゴラは暑くて何もする気になれなかった。荷物の整理をするだけでも、暑さのせいでため息ばかりついて、さっぱりはかどらなかった。慣れていないからだと思っていたら、家族みんながボーっとしていた。何も娯楽のない砂漠での生活は退屈だった。都会育ちのモロッコ人も、砂漠はつまらん！と言っていたくらいだから、当たり前か…。

思い切ってリピーターを経験して、観光とはちょっと違ったモロッコを覗いてみると、モロッコという国がだんだん不思議に思えてきた。そしてその不思議な国モロッコに魅力を感じ始め、また一年後機上の人となっていた。

今度はスペインからモロッコにあるスペイン領のセウタへフェリーで渡ってみた。フェリーを降りてモロッコ国境まで行くバスを探していたら、ここでもまたうっとおしいガイドが寄ってきた。ここはまだスペインなんだからと安心していたのに、フェリーを降りた瞬間からモロッコみたいだった。ガイドは断ってもしつこく付いてくるので、お巡りさんに国境の場所を尋ねたら、「モロッコ行くのだったらこれに乗りなさい」と、パトカーで国境まで送ってくれ、うまくガイドを追い払うことが出来た。「ここはエスパーニャ（スペイン）であっちがモロッコ。私達はＧＯＯＤだけど、モロッコ人はＢＡＤ」と、繰り返し言っているお巡りさんの陽気さから、ここはまだスペインなんだと実感した。お巡りさんは私達が日本人だと知ってか、「この前、香港が日本に戻っただろう？」と、香港返還の話を始め、ここもモロッコに返還され、彼らは早く本土に戻りたいんだろうなぁと思った。最後に「香港は日本じゃなく中国だよ」と、ちゃんと教えておいてあげた。

スペインの国境を出るまではスムーズだったが、モロッコに入国というところで、パスポートにスタンプを押してもらうだけで、炎天下を一時間近くも待たされた。窓口を覗いてみたが、仕事しているのか、さぼ

っているのか、さっぱりわからなかった。モロッコではよくあることだと思いながらも、なかなか理解できずにいたが、帰国してからあるモロッコ人がTVで、「モロッコ人は誰かが死んだときと火事以外では走らない」と話していた。これを聞いてやっとこのモロッコ人ペースを納得することができたような気がした。

長距離バス乗り場へ行くと、バス乗り場によくいるおっせかいおじさんが「どこ行くのか?」と近づいてきた。今まではおじさんの乱れた格好や、雰囲気が恐ろしくて近寄ってこられるとおびえていたが、それにも慣れてきたのかおじさんに「シャウエン」と、行き先を言ったら、このバスだと案内された。私達が乗るCTM(国営のバス)はこのぼろバスとは違うだろうと何度もおじさんに訴えたのに、おじさんはこれだ!と何度も言い張るので信用してバスに乗りかけたら、バスのドライバーにCTMはあっち!と注意されてしまった。「だから違うって言ってるやん!」とおじさんに日本語で文句を言ったら、おじさんは小さくなっていた。おせっかいをしてチップをもらおうと必死になっている姿に、おじさんの苦労が見えてくるようで、腹も立たなくなった。

旅の途中で知り合った日本人ツーリストから、砂漠のある南部がやはりモロッコらしくて好きだと聞き、懐かしくなって警官のアハメッドに頼んで、あの乗り合いタクシーを予約してもらい、もう一度メルズーカに行ってみることにした。あいにくタクシーは出発した後だったが、どうしても今日中に行きたいと頼んだら、どこからか友達だというタクシードライバーを呼んできてくれ、それにタダで乗せてもらいメルズーカへ連れていってもらった。

メルズーカの安宿に連れてきてもらい、六十DHという部屋を見せてもらいそこに泊まることにした。そのままホテルの人と食堂で話し込んでいたら、別の男性がやってきて、もう少し広い部屋が百DHだからそっちにしないか?と勧められた。安い方でいいからと断ると、どうしても広い部屋に泊まって欲しいのか、「今、狭い方の部屋の鍵がないから中に入れない」と言い出した。さっき部屋を見せてもらった時はちゃんと鍵をあけて中に入り、部屋を見せてもらっていたので、彼が嘘をついてることはわかっていたが、その嘘がおかしくて呆れてしまった。だんだんどうでもよく

なってきたが、粘って広い部屋を七十DHに値切ってからOKした。おじさんは「本当は狭い部屋が七十DH、広い方が百DH、私達が夕食にと頼んだ二十DHのオムレツは三十DHなんだ」と、料金を訂正していたが、もちろんオムレツは二十DHのままにしてもらった。でも、オムレツにはパンとサラダが付いていたが、サラダは粗末なものだしオムレツもただの目玉焼きだった。それもなぜか黄身がなく、『白身だけ』だった。もしかしたら十DH値切った分、減つられてしまったか？

翌朝、砂漠での日の出は感動だった。ここのホテルの人は、前回行ったホテルとは違って、ラクダを断っても嫌な顔をせずに、温かく接してくれ居心地はよかった。まあ、お客は私達だけだったというのもあるのだろうが…。砂漠には邪魔者もおらず充分良さを味わえ、前回とは違って、苦労もせず、実りある砂漠の旅となった。おまけに、帰りの乗り合いタクシー（ワゴンタイプ）に乗ってみると、なんと座席の後ろに、メーメーと子羊達が乗っていた。私の

足下にまで羊が横になって乗っており『羊さんと一緒？』と、思いがけない珍道中に驚き、興奮してしまった。だが、この珍道中をアハメッドに話したら、『それがどうしたん？』って態度で受けもせず、全く相手にしてもらえなかった。これがこの国の『日常茶飯事』なんだろうか…。

リピーターになった理由の一つにフェズ観光があった。時間がなくパスしてばかりだったので期待が膨らみ、どうしてもあきらめられなかった。今回やっと来れたと思ったら、期待とはひと味違うフェズ観光となり、とっても滑稽な出来事が待っていた。

迷路のようになったメディナの中を、迷わずに歩けるか心配だったが、なんとかガイドブックの通りに進めばガイドなしで観光できた。そこまではうまくいったが、帰り道で同じ道を戻ったはずが、どこを通ってきたのか途中でわからなくなってしまい、迷ってしまった。立ち止まっていたら『こっち！』と無言で道を指して教えてくれるおじさんが現れた。腰を低くしてご丁寧な格好で教えてくれるので、この道が正しいのだと思い付いて行きかけた。その瞬間、後ろから肩を叩かれ、何事かと振り返ったら、そこに立っていたお土産売りのおじさんが、顔を左右に一回振って『ダメ！』と止めてくれた。まさかあのご丁寧な道案内人が悪質ガイドとは思いもせず、それを見抜けなかった自分にショックだった。ガイドが異変に気づきすぐに戻ってきたので、お土産売りのおじさんにお礼も言え

ず、そのまま知らん顔をしてその場から逃げた。お土産売りのおじさんは、はたきのような物を傘を差すような格好で持って、道端にじっと立っていた。その持っていたはたきで私の肩を叩き知らせてくれたようだ。その叩く瞬間をすべて見ていた友達は、「おじさんの棒振りは手首のスナップがきいていて、絶妙なタイミングだった」と、あとでずっとほめていた。表情一つ変えずに『ダメ！』と合図したおじさんから、その一瞬を想像してみた。『ナイス！』このおじさんの不思議なキャラクターに大笑いしてしまった。おじさんはいつでもみんなに知らせられるよう、あのように売り物のはたきをあのような格好で持って、あそこに立っているのだろうか…。

フェズはメディナのある旧市街がモロッコらしくて有名だが、私達が泊まった新市街ではヨーロッパと変わらない風景があった。カフェで休憩していたら、外を通る人達が私達を見て、笑顔で挨拶してくれた。その時フッと、初めてモロッコに来た時の衝撃的な印象がよみがえってきた。恐い顔ばかり浮かび、こことは全く別の国のように感じた。ここへはもう二度と来ないと思うほど当時は辛かったはずなのに、あの時に味わった新鮮な空気をもう味わうことができないかと思うと、今度は懐かしさがこみ上げてきた。かめばかむほど味がでる不思議な国モロッコの魅力に、いつのまにかはまっていた。

三度目のモロッコの旅もこれで終わった。スペインに再び戻ったとき、うるさい奴らが誰も寄ってこない、この平凡な静けさがなんともさみしかった…。

【写真】

一ページ㊦フェリーの上で・ジュラバ姿
二ページ㊦フナ広場の屋台
三ページ㊤カズ君達と。知らない人も一緒
四ページ㊤モロッコの衣装を着せられてアハメッド達と記念撮影
五ページ㊦ラッシーの親戚のお宅。モロッコ女性衣装を着せてもらった
六ページ㊤滝・滝に行くまでの景色
七ページ㊤ティネリールのオアシス
八ページ㊤アハメッドの義姉。ミントティを入れているところ
㊤ザゴラのアハメッドの家族。夕方涼しくなると庭に絨毯を敷いて団らん
九ページ㊤長距離バスチケット売場
㊤ブルーの町で有名なシャウエン
十ページ㊤メルズーカの砂漠
十一ページ㊤たくさんの店が立ち並ぶフェズのメディナ内

味わいあるモロッコの旅

二〇〇二年六月（二〇〇〇年に書いたものを再編集）
新居靖子著
旅行日時：一九九七年四月二十日～四月三十日
一九九八年四月二十一日～五月四日
一九九九年四月十六日～五月一日
一ＤＨ（デラハム）約十一円（二〇〇二年現在）